楽しい仲間たち

水田ボーイズ

田中監督　　下川会長

昭和51年、筑後市内で初の少年軟式野球チームとして誕生した水田ボーイズです。現在、田中義康監督を中心に、部員総勢29名で「明るく、強く、たくましく」をモットーに、チーム一丸となって日々練習に取り組んでいます。野球の技術の向上はもちろんのこと、挨拶や礼儀そして、協調性や人を思いやる心を持って、チームワークの大切さを学んでいます。今年、創部35周年を迎えるにあたり、水田ボーイズとして培われた伝統と実績を礎に、次世代を担う子どもたちの健全育成に励んでいきます。

会長　下川　智運

街かど gallery

広川町
中山　臣子

熊本の田舎に育った性か自然が大好きです。

老後の楽しみに何かを始めたいと思っていた時に、小学生に混って絵を描く機会がありました。遠い学生時代を思い出し乍ら絵を描いていると自分の世界に浸れ、時間を忘れて、楽しいひとときが流れます。絵画教室で先生や先輩方の素晴しい油絵を観て、私も習ってみる事にしました。

いざやってみると、なかなか難しく思う様に描けませんが、楽しく勉強し乍ら、自然をテーマに描き続けたいと思います。

この絵は八女市の宮野公園から飛形山と矢部川の川原、桜並木を望む私の好きな風景です。

卒後66年を迎えた方の同窓会が開かれたというので参加者の一人、榊チカエさん（82歳・広川町）を訪ねてお話を聞きました。3月26日、久留米市で八女津本科第19回（昭和20年）卒業生の同窓会をしました。（幹事は久留米市の案納澄子さん）私たちは昭和38年から平成15年迄（41年間）毎年各地域の人が世話役となって会場を回して同窓会を開いていました。今回は9年ぶりの復活同窓会でした。当日は、福岡市、太宰府市、佐賀、田川、八女市、広川町等から25名の出席がありました。みんな一苦労も二苦労も荒波を乗り越えてきた者ばかりですから昔の思い出を語ったり、今の恵まれた暮らしに感謝したりと時間が足りない位でした。

当時の女学校生活はどうでしたか？私たちの本科は4年制で尋常小学校6年生13歳の時入学しました。一学年2クラスで生徒は120名位いました。担任は、佐々木先生と大籠先生、東校長先生でした。男は外で仕事、女は家庭を守るという社会風潮の中で、学校の教育方針も良妻賢母となるための教育が主で裁縫とかお作法等を教わりました。私は広川から今の国道3号線を当時久留米市まで走っていた三井電車で通学していました。八女郡東部の人は寮生活をしていました。学費は修学旅行の積み立てを入れて月5円位だったと記憶しています。福島町は映画館や劇場もあり、人出も多く大変賑わっていました。戦争が激しくなり私たちの時代は遠足も修学旅行もなく卒業式も簡単なものでした。登校しても、授業はなく奉仕作業で吉田山へ開墾に行ったり、和紙とこんにゃくのりで風船爆弾を作るのが日課でした。私たちはそんな特別な経験をしましたから、特別仲がよくて絆が強いのでしょう。このようにして私たちは戦争の時代、敗戦、その後の激動期を生き抜いてきました。今回の東北大震災で被災地の方々は大変なご苦労をしていらっしゃいますが、日本人はちょっとやそっとの困難には負けませんからきっと復興されると信じています。

2年後84歳になったら又お会いしましょうと言って別れました。「再会できることを念じてまだまだ頑張ります」と元気にお話して頂きました。

つながり

東日本大震災にてお亡くなりになられた方々の御霊に黙祷を捧げます…。春先の大惨事で、我等釣り人は一挙に畏縮せざるを得なかった。というのはあの大津波が釣りの最中にでも来れば、命はないからだ。

全国に繋がっている私の周りにも、数名実家が被災流出された方々がおられる。ネットで知り合い、釣り場で会い、会話を交わせば意気投合してしまう。元々同じ趣味なので、ネット上ではあるが相手を理解しているので、即座に打ち解け仲良くなる。

そのような間柄なのでひとごとは思えず親身になるのも当然かもしれない。…全国に同じ思いをされておられる方は多いはずである。

去る3月半ばにネット上で、義援金や支援物資について会議を行った。参加者は被災地に帰省した仲間をはじめ、四十数名であった。現地からの声を中心として必要な物資、義援金の集め方と送り先を決め、深夜に終了した。

その際、通常の経済活動も行わなくては、被災地以外の地域の経済も疲弊してしまうのではないか、と言う意見も出た…。それではと、私達釣りファンが釣りをする際に、チャリティーしようということになった。春先の釣りは低水温のため、釣果につなげるのはなかなか難しい季節である。少しでも水温の高い黒潮暖流が近くを通る高知県南西端の柏島で開催した。釣果はまずまずだったが、チャリティーの義援金が予想を上回る額となったことに満足し、翌日郵便局から日本赤十字社へ送金した。釣りを通じて、多少なりとも復興へ向けて貢献出来れば幸いである。

次回以降も、チャリティーの釣り大会である事は云うまでもない…。

―「磯の旅人」

花の山旅 ⑦

川崎病院医師　日吉澄之

先月に引き続きマレーシアのジャングルで食虫植物ウツボカズラを多数見ました。

水差し植物（ピッチャープラント）とも呼ばれ、写真の如く葉っぱが進化して出来たもの。Aに甘い香りを出し虫を誘い、Bの中にすべり落とす。Bの内側には逆さに棘があり、一度落ちたら這い上がれない。Cに強い酸性の液（Ph2）を溜め、虫を消化してしまう。大きいものでは40～50㎝あり、ねずみや小鳥を採ったという記録もある。今回わたしが見たものは、大きなスズメバチが入っていた。同じ種類でも肥沃な場所では大きく、栄養のない岩場では人差し指大のものがあった。